

看護における戴帽の変遷とその背景

(指導：三木福治郎教授)

助手 仙 田 洋 子

I はじめに

現在、わが国の看護教育制度においては、各種学校である3年制の高等看護学校をはじめ、3年制短期大学、4年制大学など同じ看護婦資格を得るための教育機関にも、その設置基準、教育課程によってさまざまなものがある。今後もなおその変革が予想される中で、従来の教育的諸行事も当然影響をうけるであろうから、これら諸行事について、その都度再検討することが必要と思われる。

その一つに看護の場と密接に繋がりを持ち続けて来た看護帽にまつわる戴帽式がある。この儀式は、従来殆ど⁽²¹⁾の高等看護学校で行われて来たもので、何の疑いも抱かれなかったばかりか、むしろ戴帽式を一つの契機として自らを律し将来への道しるべとしたため⁽²¹⁾荘厳に行われて来た。しかし学制の改革により単位履修制となった場合、果してこの戴帽式がどのような意味をもつだろうか。

筆者は本学看護科において第一回生を迎え、やがて彼女らを臨床実習に送るにあたり、⁽²¹⁾キャッピング⁽²¹⁾なる従来の儀式ともいえる事態に直面して、一種の戸惑いを感じ、戴帽式の歴史的な由来を調べてみたが、その答えを容易に得られないままに、文献的渉猟をはじめ、私見をまとめてみるに至った。

II 文献的渉猟

1) 白衣とキャップの始まり

看護界における近代的先がけとも言うべき聖ヴェンサンの慈善淑女団のように、半僧半俗の服装は、すでに1820年頃レンネックの診察の場に立っている看護婦にもみられて、⁽⁴⁾実に興味深い。彼女らは尼僧の服の上に白のエプロンをかけて仕事をしているが、僧服の特徴である広中の白袴とそれに大きな白い帽子をかぶっている。石原明氏は⁽⁴⁾「看護婦の神聖なシンボルとされているキャップは、むかしの⁽⁴⁾看護尼⁽⁴⁾といわれた宗教的看護の時代の名残りで、戴帽式は尼僧の入信式を模したものに他ならない。」⁽⁴⁾といている。

1820年、看護界における祖とも言うべき、Florence Nightingale が誕生した。彼女は社会奉仕活動のはじめに宗教運動に突入し、その「母の家」で献身的な活動を行なったのである。この Mutterhaus は、看護にあたる女子献身者の養成所であって、ここへ入館すると「着衣式」があり、更に「祝福式」へと進んだのであるが、実はこの「着衣式」こそ今日の戴帽式⁽²⁾につながるもののように思われる。

F. Nightingale はその後ドイツへ行って、看護学を専攻した。彼女の学んだのは Institute of Protestant Deaconesses であって、ここでは女子学生たちが、白い硬い帽子を着用して

いた。

また、アメリカで最初に教育を受けた看護婦である Linda Richards(1873年 New England Hospital を卒業した)の頭には、たくさんのフリルのついた耳覆いのある飾りで一杯のものが被さっていた(1873年)。更にニューヨーク市にある産科病院の学生の初期の帽子は、前と後と両横で小さな縁を形づくり、頂上をふくらませるために、ひだを取った細いハンカチのようなものであったし、サンフランシスコの小児病院の帽子は婦人用室内帽子で、丸くひだを取った大へんおしゃれなものであったが、非常にこわれ易く、とても化粧鞆に入れて持ち運び出来るものではなかった。

こうして1875年迄には、おしゃれのための帽子が非常に広範囲に亘ったので、米国でもっとも古い病院に数えられている Bellevue Hospital でも、同年12月の会議で「帽子は頭髪をおおうためのものであって、単なるなまめかしい飾りのものであってはいけない、ということ看護婦達に強く印象づけるべきである。」との方針が打出され、翌年から看護婦は帽子と白衣を使用しだした。⁽¹⁹⁾しかし当時の服装は全部が純白の生地ではなかったらしく、看護婦は白地に細い淡色ブルーのストライプ地のツーピースで、キャップも共布で縁に白いレースがついたものであった。⁽⁴⁾

2) 看護帽の意味するもの

看護には、その歴史からみて社会奉仕的な要素が多分にあり、この精神に生きたものは古くから宗教的なものに由来するところが多い。尼僧はその服の上に広巾の白衿と、それに大きな白い帽子を被っている。⁽⁴⁾これを真似て何の意味もなく単に白い被り物としてのキャップが生まれた(1820年頃)。のちに実用的な意味を加えて、女性が働くときその長髪の乱れを防ぎ、長髪をとりまとめるものとしての被り物に有用であることを見出すようになった。⁽⁵⁾更に1880年には消毒した白い作業用エプロンをつけるに至ったことも、当時の手術場風景をみるとよく判る。

一方、看護婦養成のための学校が設立されるようになって、看護帽にプライドと職業に対する情熱を誇示する意味も加わり、単に看護の職にあるものとは区別した有資格者を象徴するものとなり、やがて各学校のプライドを示すための学校の象徴となって来た。このことはキャップの材料、デザインに工夫がなされ、やがてこれが伝統となってひきつがれていったことから充分理解される。

看護の制服は初期の頃より白い布地を多く用いている。これはカトリック修道女の黒衣が中世ヨーロッパの人間虐待を象徴しているのに対比する近代的なものとして、⁽¹⁾更には汚れなき色、汚れの目立つ色、清潔を意味するものようである。

3) 日本におけるキャップの歴史的背景とその変遷

わが国における篤志看護婦のはじまりは、Nightingale のクリミア 従軍におくれること15年である。即ち1868年(明治元年)横浜に軍陣病院が作られ戦傷病者の看護にあたり、その看護人を雇い入れるのに非常に困った様子がうかがわれる。⁽¹⁷⁾当時の看護人は専門知識を持たぬ未経験の既婚婦人らであった。のち、この中から東京帝国大学医科大学附属病院の看護婦の元祖となるものが現われた。[※]

※当時の優秀な看護人の一人、杉本カネは、1873年順天堂病院が創立されたとき婦長となった。

その後1887年佐野常民らが、ヨーロッパ視察後 万国赤十字社にならって「博愛社」を創設

し、官職の区別なく西南戦役における傷病者の救護にあたった。⁽¹¹⁾これが日本における看護事業の始めであり、赤十字事業の発端である。博愛社病院創立当時の看護婦は医科大学病院その他において多少看護に経験のあるものを採用してはいたが、未だ秩序ある教育を実施するには至らず、もっぱら実地練習を主としていた。⁽¹⁵⁾

わが国最初の看護婦学校は1883年、宣教師米人ジョン・バラ夫人の「是非日本に看護婦学校を設ける必要がある」という熱心な意志を受け継いだ桜井女学校のToole女史により、1884年その学校内に設けられた一年課程のものであった。看護法はナイチンゲール看護婦学校出身の英人、A. Vetch 女史が教授した。^{(11),(17)}次いで1884年10月共立東京病院看護婦教育所が設置され、^{(10),(11)}英国セント・トーマス病院に学んだ高木兼寛が米国より E. Reed を招きナイチンゲール式教育方法をもってあたった。

さて、当時服飾についての社会的背景はどうであったか。明治の初年洋風兵式訓練の必要から洋服が採用され、兵士の服となり⁽¹⁸⁾ (1867年)、更に1871年に軍帽が採用された。⁽¹⁸⁾又、民間人の間でもパナマ帽、ナポレオン帽、烏打帽など各種の帽子が用いられるようになり、かくて日本の着物に洋式の帽子をかぶる風俗がはじまった。当時の学生は着物に学生帽、後にはそれに靴をはくことも行われた。こうした都会の流行が次第に地方に波及し、京都周辺の山村には婦人の間に礼儀として手拭を被る風が残っていた。それも後には小さく折って頭に戴せるだけとなり又は男と同じくこれを取るのを礼儀とするようにさえなった村もある。⁽¹⁸⁾

一方京都において、1886年に「同志社病院京都看護婦学校」が設立された。⁽¹¹⁾アメリカ伝道会より Linda Richards 女史が招かれ看護教育にあたった。翌1887年には「日本赤十字社篤志看護婦人会」が設立され、「看護事業 ハ之レヲ 金銭ノタメニセズ、高尚ナル 道德化 ヲ以テスル。」とした。⁽¹⁵⁾この篤志看護婦人会総裁には、有栖川宮妃、皇族、華族の有志婦人がその発起

※ 施設としての養成所設置はこれが最初であり、新島、ベリーらの手によって設立された。この時生徒は5名、職員は校長が新島襄、教師兼院長がベリー、教師兼看護婦長が L. Richards、教師ドクトル白藤信嘉、川勝原三という陣容であった。

人となった。かくて日本の看護事業並びに看護教育は日赤を中心に国家政策がそのまま注入され、戦争と宿縁的なつながりをもって発展した。続いて東京帝国大学医科大学附属病院に看護婦養成所が設置され、⁽¹¹⁾1889年11月より養成開始。教育年限は2年で看護法は A. Vetch 女史が担当した。

以上のように当時日本の看護の専門的教育者は英米の看護婦たちであった。つまり多年の経験と知識の上に積重ねられた近代的看護法の導入であり、日本の医学教育がドイツ医学であるのと異り、看護教育においては英米式看護法の導入という体制であった。

当時、世界の看護水準はドイツよりも英米がすすんでいたことから、日本の看護教育は世界の最高水準を移入されたことにもなる。しかし軍事目的のために量的増大を図った政府の施策は、看護婦の質を低下させた。⁽¹¹⁾

看護婦の創生過程を考えると、明治政府の行ったすべての事業と同様に、看護制度も又戦争と深い関連をもっていた。即ちわが国看護制度が担わされた役割は一方では慈善事業的色彩の濃厚なものであり、他方軍国主義的侵略政策を補強するものであった。⁽¹¹⁾

この時代の服装は女子教員が袴をはき(明治18~22年)、⁽¹⁸⁾当時移入の洋服と対したが、明治の新政府が率先して欧化主義を唱え、外国人との交際に努めたいいわゆる鹿鳴館時代の現出で、

一般社会でも鉄道の現業員とか、看護婦のように制服を作った例が少なくなかった。⁽⁹⁾赤十字社篤志看護婦人会で日露戦争の頃、黒地の洋装の制服を作ったことは破天荒のことであった。看護着に白地の看護服が進出したのもこの頃である。又当時の上流社会の婦人の服装をみると、⁽⁹⁾おそらく唯一の働く婦人の洋装であった看護婦の白衣の形に模したものがあるのは興味深い。看護婦の仕事は、当時すでにどうしてもキモノでは出来なかった。即ち病人の傷の手当てをしたり、医者の手術を手伝ったりするのに長いものでは動けないし、もしさわってバイキンでも入ったら大へんなことになる。常に清潔にするためにもたえず着衣を洗濯せねばならないが、これも着物や帯では無理であった。従って英国の看護婦の制服をそっくりまねて、はじめから洋服であった。⁽¹²⁾このように看護婦の服装は働く女性の便利さのためからだけでなく、あくまで看護される人のためのものであった。⁽¹²⁾

この白衣と相俟って白い看護帽が既に明治20年の桜井女学校看護婦養成所の記念写真にハッキリと認められ、更に日本赤十字社の看護婦養成所の第一回卒業写真（1890年）には、皇室の菊の紋章を模した16葉ヒダのついた看護帽が頭上に輝いているのが認められる。しかし明治26年⁽¹⁵⁾に始まる生徒候補者制度（現在の予科期か？）の人達は看護帽を着用していない。明治22年⁽¹⁴⁾には看護婦養成規則20ヶ条が制定発表され、この規則に服帽を規定してあるのがみられる。⁽¹⁵⁾1890年4月より修業年限三年間の日赤救護看護婦養成が開始され、又この頃の濃美大震災の救護では、一回生の岡田女史など縞の筒袖の上にエプロン掛けで働いている。⁽¹⁶⁾日清戦争の頃は、今のような白衣であつたらしくあの火筒のひびき遠ざかる、あとには虫も声たてず……。この歌は日清戦争のため新橋駅をたった白衣の彼女らを歌ったもので、1896年の三陸津波当時も白衣で行軍して女の兵隊が来た、などと騒がれているし、あの16葉ヒダのついた看護帽の前中央⁽⁸⁾に赤十字章を配したその徽章が罰則を受けたときには、はづされた事実の記録がある。⁽¹⁶⁾

※ 病院主任医山上兼善氏を看護婦養成の主査として明治22年まで、この新規事業のために準備と研究が積まれた結果始めて看護婦養成規則20ヶ条を創定した。

看護婦養成規則20ヶ条（原文のまま）

(イ) (ロ) (ハ) 省略す

(ヘ) 生徒の服装

生徒ハ規定ノ服帽ヲ着用ノコト、但シ外出時ハ此ノ限りニアラズ。

1904年東京築地に聖路加女子高等看護婦養成所が設けられ、⁽¹⁰⁾当時日本最高の看護婦養成をめざした（二年課程教育）。⁽¹⁷⁾この学校では、すでにこの時代からキャップを着用させ、この戴帽に深い意味をもたせていたようである。

かくして、わが国における看護婦養成課程は、日本赤十字社と聖路加国際病院の二主流になった。日本赤十字社は戦争と共に発展し、第一次大戦のとき日本赤十字社が救護班を組織してフランスに派遣した時の写真では、各国赤十字社の看護婦の白衣姿がよく比較できる。日赤の看護婦には、目の荒い薄地で堅めの綿布であるカンレイ紗の生地を用い、看護婦自身が、これを織って作ったということである。⁽⁴⁾一方、聖路加は宗教的雰囲気の下で学生の養成を行ない、⁽¹⁷⁾やがて3年制の高等看護教育に発展した。更に1927年には聖路加女子専門学校へと昇格し、1930年には研究科として1カ年の公衆衛生看護学科が開設される迄に発展した。

この頃訪問看護の理論と実際を研究し、看護事業を学んでアメリカより帰国した保良せき女

史は、わが国看護関係者のために、雑誌「看護婦」を創刊し、また大阪朝日新聞社会事業団は、大阪に公衆衛生訪問婦協会を創設するなど、社会的にも発展したわが国看護界は、1934年10月20日、第15回国際赤十字会議を東京で開催するに及んで、ついに国際看護界にもその名を連ねるに至った。

一方、1933年3月横浜市は看護婦養成規程を公示し、小学卒で修業年限2年の看護婦養成所を設置したのに続いて、1939年3月栃木県に1年課程のものが、その翌年長野県にも市立岡谷病院に看護婦養成所が、それぞれ設置されるなど教育水準はあまり高くないが、広く看護婦の養成が規程され、組織づけられはじめていた。⁽²²⁾

しかし日華事変(1937年)に続いて太平洋戦争(1941年)が勃発し看護婦の需要が急増したことから、日本赤十字社は救護看護婦養成規則を改正し戦時特例による甲種、乙種救護看護婦二本立ての教育をはじめたり、繰上げ卒業を行なうなど看護婦の質的な面は考えられなくなり、資格取得の最低年齢も18才から17才に引下げられた。更に1944年には戦時特例によって看護婦養成の修業年限を短縮したり、看護婦資格取得の最低年齢を16才に迄再び引下げた上、各陸軍病院でも看護婦の養成をはじめたのであった。

1945年8月、終戦と同時に日本赤十字社は、甲種救護看護婦養成のみを残して、戦時特例による乙種臨時救護看護婦養成を廃止した。⁽²²⁾軍病院は国立病院となって、病院は欧米の病院経営に準じた新制度を採用した。

当時わが国の看護婦養成には、高卒(旧制高女)を対象としたものが甚だ少く、看護教育は比較的低調であったので、1946年5月軍政部公衆衛生部看護課主催で、約3ヶ月間の看護婦再教育が始まった。

当時の進歩した医学に対応して看護の水準を高める必要に迫られたために、程度の高い教育を施すことにより欧米に比べて遜色のない優秀な看護婦を養成するという目的にそって、国立岡山病院は高校卒業生に3カ年の看護教育を施す新制度の養成所を設置するよう厚生省から命ぜられた。⁽²⁰⁾

これによって新制度による養成規定の大綱が決定されたので、いよいよ開講の準備に着手した。GHQは当時看護婦養成の権威者であるカールソン女史を岡山に派遣し、その指導下に実習場である病院も教育に適合するように準備された。

※ 昭和23年2月10日、学院開設についての打合せが国立岡山病院で行われた。

出席者はGHQ公衆衛生係カールソン女史、厚生省医務局久下次長、小西技官(病院課)、引地中国医務出張所長、米軍岡山軍政部衛生係セッション大將、日下国立岡山病院長、岩藤副院長など。

当時の看護婦の服装は今と大差なく、カールソン女史の指導により、第一回生に戴帽の儀式が荘厳に行なわれたのである。

又東京においても1949年、国立東京第一病院附属高等看護学院で4月に入学した42名の看護学生の戴帽式が9月に行なわれた。⁽¹³⁾これは6カ月の予科期間が終って本入学と解釈されていたようである。⁽¹³⁾

III 考察並びにむすび

筆者は戴帽とその意義を渉猟するにあたり、看護の制服としての看護帽と看護界の歴史的変遷を辿って来たところ、職業看護への推移、人道主義の浸透、近代看護への萌芽形態を、まず

St. Vincent de paul の慈善淑女団に見出したのである。しかし 慈善淑女団に組織された田舎育ちの若い敬虔な淑女たちは、アウグスチヌス派の尼僧たちの下で訓練されたこと⁽¹⁷⁾、Elisabeth Fry (1780~1845) の養成したイギリスで初めての宗教人でない職業的看護婦を指して、国の習慣上、看護尼と呼んだこと、更に近代看護を確立した F. Nightingale (1820~1910) でさえ、17才のとき神の“ Calling”を感じ、Thodor Fliedner (1800~1864) のデアコニッセ運動に参加し、彼女の社会奉仕活動が、まず宗教運動としてはじめられていること、⁽²⁾などから見ても宗教的な行事、習慣をそのまま看護の世界へ導入するにはほとんど抵抗がなかったことは容易に想像出来るところである。このことはレンネックの診察場風景 (1820年頃) における看護婦の半僧半俗の服装にもみられるところであって、尼僧のかぶった白い帽子は、人道主義の先がけとして知られる St. Vincent de paul をしてさえ「看護は愛の身体的表現である」と説かしたように、強いキリスト教的影響の下で、はじめ看護婦らに単なる模倣として取入れられ、長い歴史の中で今日の看護婦の象徴とされるまでに意味づけられ、育てられて来たものであろう。石原明氏は「尼僧の入信式から今日の戴帽式は誕生した⁽⁴⁾」といい、又青木茂氏も「ナイチンゲールが最初に学んだ Mutterhaus における行事、即ち入館後、着衣式があり、更に祝福式へと進んだ習慣、この着衣式が今日の戴帽式の祖である」と述べていることなど考え合わせれば、この辺の事情を理解するのに大きな助けとなるであろう。

さて尼僧の模倣であった看護婦のキャップはどのように変遷したであろうか。

アメリカで最初の教育をうけた看護婦、L. Richards のあの看護帽 (1873年)、アメリカの産科病院、小児病院などなど、看護婦は各病院によって、それぞれに大へんおしゃれな飾りの婦人用室内帽子を用いたが、これらは凡そ実用的なものとはいえなかった。⁽¹⁹⁾

一方イギリスにおいても、ヴィクトリア朝上流婦人の間で、おしゃれのための室内帽子が大流行した。⁽¹⁹⁾ここでも又、各々の病院によって看護婦の帽子は型、材料共に異ったものであった。こうして当時英米の婦人らの間でおしゃれのための帽子が流行した中で、看護婦の帽子も当初、尼僧のかぶりものの単なる模倣にすぎなかったものが、この頃にはもっぱらおしゃれのための帽子となったように思われる。「看護婦の帽子は頭髪をおおうためのものであって、単なるなまめかしい飾りものであってはいけ⁽¹⁹⁾ない」との方針で1867年 Bellevue Hospital の看護婦たちは、おしゃれのための帽子から実用的で衛生的な、作業のための Hair Covering としての帽子で、見た眼も美しく品位を保ち、患者にも信頼をいだかせるものでなければならぬと考えるようになり、これが人類愛を基盤とする看護の精神を表わす冠として、今日の看護婦のキャップが象徴的性格をもつようになった始まりと考えられる。しかし「キャップに奉仕と助力の雰囲気をもたせるべきである」と記されていたり、⁽¹⁹⁾1880年頃の消毒済みのエプロンをつけている、⁽⁵⁾ということなどからみると、衛生的な意図からのキャップや服装という程度で、細菌学的な有用さに迄には至っていないようである。

やがて看護婦養成学校が設立されるに至って、看護帽は資格の有無をあらわし、職業に対するプライド、更には看護道徳、倫理的シンボルへと発展していったようである。キャップの型や材料を学校別に区別したことなどからも、⁽¹⁹⁾後には学校を表わすシンボルへと、その意味づけは深まっていったことが窺われる。

わが国における看護の専門的教育は、これより少し遅れて、多年の経験と知識の上に積重ねられた近代的看護法を身につけた英米の看護婦たちによって移入された。即ち1883年の桜井女学校の Toole 女史をはじめとして、日本の看護教育は世界の最高水準を移入されたのであ

(11)
た。

一方わが国の社会的背景も1867年には兵士の軍服、1871年には軍帽の採用⁽¹⁸⁾という明治政府の欧化主義、富国強兵の軍国主義の中で、当時の女性の職業の花型であったと思われる看護婦の服装は最初から英国で使用された洋服に帽子という、英国の看護婦の姿がそのまま取入れられた⁽¹²⁾ようであるが、看護婦の社会的地位は男尊女卑の封建的臭気の中で職業婦人と呼ばれ、軽視されこそすれ高くはなかった。その上慈善事業的博愛、奉仕の看護精神は愛国主義、軍国主義にたくみに利用せられたのであった。このような時代的背景の中で1890年、日本赤十字社看護婦養成所の第1回卒業生が、皇室の菊花の紋章に模した帽子を頭上に頂いていること、1904年⁽¹⁵⁾創立の聖路加女子高等看護婦養成所でも、その当初からキャップを着用させ、その戴帽には深い意味をもたせていたことなどを考えれば、わが国看護婦養成の初期より、看護帽の重要さが、一方では皇室崇拜という日本赤十字社において、他方宗教的な色彩をもった聖路加女子高等看護婦養成所において、教え伝えられて来たことが明らかになる。

更に第二次世界大戦終了後の教育制度変革の一分野として、看護教育もGHQナースの指導のもとに一新した⁽²⁰⁾。即ち三年制高等看護学校の誕生であって、これは米国における病院附属看護学校のシステムによるものであった。従って教科課程もCappingなる行事を含めて、すべてそのまま移入された。そして入学後6カ月の予科期を設け、学生自身も学校側も、本科へすすむ準備期間として、この期に看護婦としての適性その他が認められ、予科期を無事終了したものにのみ戴帽を許可し本科への進級となったものである⁽¹³⁾。又この儀式の中にはキャンドル・サービスを含めて、ナイチンゲールの献身的な看護の精神を認識させ、看護帽の意味するもの、看護帽の持つ責任の重大さを充分に把握させ、そのキャップを戴した後、その認識の上に立って看護実習につかせるため、かなり荘厳に行なわれて来たようである⁽¹³⁾。しかしこれは看護倫理の認識と実行であって、これらのことを戴帽式という行事の中で教える一つの方策とも見ることが出来る。

現在アメリカにおいても、その教育制度は種々であり、Cappingについても各校によって、その施行状況は様々である。即ちアメリカにおける4年制大学では、ほとんど看護帽を着用していない。又2年制の短期大学でも一般に制服の一部としての帽子は使用せず、卒業式のような儀式的な場合のみキャップを使用している。そして卒業式において、卒業証と共にスクールピンを与えている。一方、2～3年制の病院附属の養成学校でのキャップは今なお、ユニホームの一部として使用されている。しかしこの病院附属の学校でも、学校によって制服に含まれているところもあれば、伝統的な戴帽式を行なわないでキャップが手渡される学校もあり、他方予科期間の終了を飾る重要な行事として戴帽式を行なっている学校もあり多種多様である。

わが国では近年看護教育強化の必要性が叫ばれ、高等看護学校を主流に短期大学、4年制大学、更には準看護婦からの2年制進学コースなどがあり、その教育カリキュラムは各種各様である。従ってこれらの教育施設における制服、殊に看護帽についての考え方は、さまざまである。これを列挙すると、

① 主として病院附属の3年制高等看護学校

イ) 日本赤十字社設立によるものは、その設立当初から慈恵の主旨をもち、篤志看護婦会の歴史をもった、菊花を型どった16葉ヒダのある看護帽⁽¹⁵⁾、そしてその中央前に赤十字章をつけたあの伝統的な帽子と、その戴帽式は必須のものであり、現在も行なわれている。

ロ) 他は第二次大戦終戦後、即ち昭和23年GHQより厚生省に指令が出され、その指導のもとに設立されたもので、GHQの指導がよくゆきわたり、戴帽式も荘厳に行なわれ、何らこれを疑うところがないようである。⁽¹³⁾⁽²⁰⁾

② 短期大学および4年制大学

イ) 短期大学

病院附属の高等看護学校より短期大学へ昇格したのもも含めて、その学校の方針によってさまざまである。しかしその歴史からみて、ほとんどの学校では、その程度に差こそあれ行なっているのが現状のようである。

ロ) 4年制大学

三校のうち二校までは戴帽式を行なっておらず、看護帽の着用すら考えていないところもある。

ここで疑問に思われることは、予科期という期間についてである。4年制大学や短期大学のように入学後は学生としての身分が保障され、教科単位修得をもとに卒業する制度では、従来の看護学校において戴帽式の重要な意義づけであった予科期なるものは完全にくずれ、他に持つ戴帽の意義、即ち看護倫理をはじめとする看護理念などの修得は、一般教養学科の履修によって、学生個人が自覚すべきものであって、儀式によって培われるべきものではないように思われる。

上述したことから考えて、荘厳なキャンドル・サービスと共に行なわれる戴帽の儀式も看護教育の教課履修の方法によって、その要、不要は決まるであろう。従って、短大における戴帽式の意義づけは、臨床実習へのオリエンテーションの一環として、学生自身が「人間生命について、総合的な観点からふり返り病院実習への心構えを喚起する機会」という域を出ないであろう。

過去の看護婦養成制度では、一つの岐路としての自覚の機会を学校行事として計画し実施して来たのであるが、⁽²¹⁾あらゆる人生における岐路や道しるべと同様に、学生個人の心の奥深くで誇りと責任を自覚することが、看護の道へのより自主的で積極的な一歩として意義あることと思う。従って近い将来、学校行事としての戴帽式が不必要となるまでに、制度だけでなく、内容的にも変革されなければならない。

稿を終るに当たりまして、終始ご指導ご校閲を下さいました三木福治郎教授に深甚なる謝意を表します。また参考文献渉猟に際しまして数多くのご教示とご便宜をお与え下さいました各位に衷心より厚くお礼申しあげます。なお、本学看護科助手若林敏子先生には、共同研究者に等しいご援助を頂きましたことを附記し深謝します。

参 考 文 献

- 1) 青木茂, 看護の思想 64頁 1966
- 2) 青木茂, 看護の思想 93頁及106頁 1966
- 3) 江馬務, 増訂日本服飾史要 236頁 1944
- 4) 石原明, 病院 第25巻 第6号 1966
- 5) 石原明, 高等看護学講座〔14〕 7頁 1964
- 6) 石原明, 高等看護学講座〔14〕 142頁 1964
- 7) 石原明, 看護教育 第7巻 第6号 1966
- 8) 児玉幸多篇日本文化史大系11〔明治時代〕 140頁 1956
- 9) 児玉幸多等篇, 日本文化史大系11〔明治時代〕 350頁 1956
- 10) 厚生省医務局, 医制八十年史 208頁 1955
- 11) 松田睦子, 立命館文学 第221号 1963
- 12) 村上信彦, 日本人の服装〔ひとつの生活史入門〕 1958

- 13) 仲田妙子, 看護学習1年 10巻 7号 12~13頁 1963
- 14) 大野潤, 世界を繋ぐ旗 49頁 1964
- 15) 海川はるよ等, 看護教育 6巻 3号 1965
- 16) 海川はるよ等, 看護教育 6巻 5号 1965
- 17) 雪永政枝, 看護学全書〔5〕 122頁及び232~236頁 1964
- 18) 柳田国男篇纂, 明治文化史13巻 風俗編 26~31頁 1954
- 19) **News week February 18** 1952
- 20) 国立岡山病院附属高等看護学院10周年記念誌 2~3頁 1958 および 国立岡山病院創立20周年記念誌 1965
- 21) **American Journal of Nursing** 1931
- 22) 厚生省医務局, 日本看護制度史年表 1960